



巻頭特集 「一生に一度」が終わり、わたしたちの愛すべき「日常」が始まる
 - 10月13日 「熊谷圏オーガニックフェス」開催 -

RWC熊谷3試合翌日曜の10月13日、スポーツ文化公園で第2回になる「熊谷圏オーガニックフェス2019」が開催される。「何をやるのかわからない」ともいわれながら県内最大級の来場者を集めた、熊谷の新イベント第2回がどんなものか第1回に続き統括プロデューサーを務める加賀崎勝弘さんに聞いた。



加賀崎 勝弘さん

「これだけしかゴミが出なかったんです」(左下)
 来場者数4万5000人、出店数147店舗がユース&マイ食器を使っている量は、事前の声で「何だかわからない」という声も多かった第1回の大きな成果の一つ。どんなイベントだったかは、
 「出店者も、お客様も、みんながいい顔してますね」って、全国でいろんなイベントに関わっている人たちにいわれたんですよ。消費する側、提供する側の境を越えた関係性が現れた、この土地の顔、ついでにいえばいいでしょうか」
 という昨年の画像が物語る。始まってみれば、M・N・M、日本フィルらの音楽ステージや「県内の高い感度のオーガナイザー」が「ヴィレッジ方式」で参加するオーガニックを取り入れた美味しい食べ物、アートやラグビーにあふれ、加賀崎さんの「渾然一体」を理想とする世界観と一致する「年齢問わず、家族で「日楽しめるイベント」だったのだ。

参加して、「こんなやり方があったのか」と目を覚まされたという声をききました。出店者同士がつながって商品を開発したりも」
 大小のこうしたプレイヤーが集まってくるのは、加賀崎さんがいう「ハコがあるから。フェス」という表現のハコに「ホームグロウン」「オーガニック」という考え方のハコ、そして「熊谷スポーツ文化公園」という熊谷が誇るハコがある。
 ◆ ◆ ◆
 「もともと一過性のイベントに終わることなく、それぞれのテーマを「日常」に根づかせていくことが目的なんです。今年の新型コロナテントである、テントサウナパーティ、イートビート、試乗があるパーソナルモビリティ、アンテナのような試みも、これをきっかけに広がっていくといいですね」
 第2回開催の10月13日は、9日にラグビーワールドカップの熊谷戦が終わり同時にラグビー場では日本代表対スコットランド戦のバブリックビューイングが行われる。熊谷史上最大のビッグイベントがきっかけだった、オーガニックという有機的な繋がりが、「レガシー」を産むことになればおもしろい。「一生に一度」が終わり、わたしたちの愛すべき「日常」が始まる。そのスタートはこのフェスからかもしれない。平成だった昨年の秋と同じ、熊谷圏の上空はひとつ。10月13日が青空におおわれることを願おう。

◆ ◆ ◆
 「収穫のつばは、オーガニックという言葉が熊谷の地に落ちたこと。よく意味はわからなくても、その考え方がばらばらばらってこの土地にまかれたことは、これから何かが始まるきっかけになるんじゃないかと思っています」
 昨年の取材で加賀崎さん自身、「わからない名前でもいいと思ってるんです」と語った「オーガニック」。現代日本では化学肥料や農薬を使用しない農産物をさすことが多いが、加賀崎さんたちは「有機的なつながり」と捉え、「サステナブル(循環可能性)」「ホームグロウン(地元愛)」とともにテーマに掲げた。有機的にぐんぐんつながったのが、「埼玉県全63市町村のキーマン」だ。
 「県内各地に存在していたキーマン同士が一緒に何かし始めた。そのことでこれまで県外のコンサルタントなどに発注していた各自治体や企業が近くのキーマンに仕事を依頼するようになれば、地域が変わってくるんだ。」

◆ ◆ ◆
 「ありがたいことに、JR東日本高崎支社様が、僕たちの社会実験的な活動に興味を持って頂けました」
 今回から協賛する同社高崎線沿線ブランドイングチームが加わることも、フェスが掲げる高い理念あつてこそ。キャッチコピー「ローカルを極め、グローバルにつながる」の具現化だ。
 「大きな会社も新しい未来をつくるために、このままじゃいけないという危機感を持って、僕らのような小さなアクションと協働する。そういう時代だと感じています」
 そして有機的なつながりは、方法を模索する若いベンチャーにも勇気を与える。
 「農福連携ヴィレッジでは、自分の信じたことをやってても伝える手段がなくてモヤモヤしてたのがフェスに



1/3が、オーガニックフェスからでたゴミ。2/3は他のイベントと持ち込みゴミだ。来場数からすると驚くべき少なさ

出店者として参加
持田 和樹さん
 障害福祉サービス事業所「深谷たんぼぼ」支援員。障害者と共に有機無農薬で食用バラやハーブを栽培。障害者と環境も含めた共生社会の実現に取り組む。

食用バラ栽培で実感した有機の力を一人ひとりの意識に広げて持続可能な社会へ
 料理店からの依頼で始めた食用バラ栽培で有機栽培の力を実感しました。当初のハウス栽培より病気になりにくい。病害虫というのは人間目線の一方的な考え方で、障害者と健康者の間も同じ。学んだのは、むだな命などないということです。
 そんな思いを抱きながら狭い範囲のつながりしかありませんでしたが、フェスに参加して点での活動が線になり、さらに新たな線になる。本当の有機的なつながりを実感できました。
 オーガニックは決して特別なものではありません。フェスを通して自然や人、地域に対する愛が芽生え、一人ひとりが日常生活で意識し行動する事により、持続可能な社会が実現できるのではないのでしょうか。

ボランティアとして参加
鷺沼 拓也さん
 (株)CORE N' CODEフードデザイナー・調理師。アスリートフードマイスター 2級、腸内フローラ検査アドバイザー・プロ。セーリング競技のオリンピック候補選手やJリーガーへの食サポートや、子ども・保護者向け食育講座などに取り組む。

一参加者→ボランティアの「宝探し」
 人のつながり中心のシビックプライドの「衝撃」
 食の仕事やローターアクトでの活動から埼玉に詳しいつもりだった自分にとって、一参加者として訪れたフェスは衝撃的でした。品物はもちろんどのブースも出店者の方々がとても魅力的で、埼玉県民であることが誇らしく思える。その衝撃と心の底から湧き立つような感動は、いまでも鮮明に思い出せます。
 今回はボランティアとして、「自分のやりたいこと」と「人・地域に喜ばれること」が重なる道を見つけた。シビックプライドは、建築物を証とした19世紀英国のオリジナルから、上質な人の繋がり＝オーガニックを中心に据えたこのフェスへ。モノからコト、そしてトキやイミに価値が移ってきた今、その活動が産み出すものをみてみたいと思っています。